

合気道史における海軍大将竹下勇の覚書『乾』、『坤』(1930-1931年)の研究

A Historical Study of Admiral Isamu Takeshita's notebooks *Ken* and *Kon* (1930-1931) on Aikido History.

工藤龍太

早稲田大学スポーツ科学研究センター

Ryuta Kudo

Waseda University, Sport Science Research Center

キーワード: 植芝盛平、大東流合気柔術、合気道、柔術、技術史

Key words: Morihei Ueshiba, Daito-ryu-aiki-jujutsu, Aikido, Jujutsu, history of technique

抄録

日本武道の一種目である合気道は、植芝盛平が大東流合気柔術を中心に数種の武術を修行し創始したものである。合気道史の研究において、その基盤形成期(1928-1940年頃)に植芝の武術技法がどの程度大東流の影響下にあったか、これまで技術史的な分析は行なわれていなかった。本研究は、植芝の経済的支援者であり、当時は合気武術等と呼称された植芝の武術技法を詳細に記録した海軍大将竹下勇が、当該期に記した覚書『乾』(収録技術数1634手)、『坤』(同1097手)について、その技術的特徴を明らかにする。

分析の結果、以下のことが明らかになった。『乾』、『坤』に記された当時の植芝の武術技法には、急所を狙う当身など実戦性・殺傷性を持つ技術が多く、それらは明確な大東流の影響を認めつつも、他流派の影響も若干うかがわれた。両史料にみられる合計2731手の技術には、156の格闘形態があり、いずれも組んだ格闘形態がそれぞれの60%を超えて想定されていた。現在の合気道の標準とされる格闘形態数(34)と比較すると4倍を超える数である。また、裏手と呼ばれる105手の技術からは植芝が画一的な形稽古のみを指導していなかったことが判明した。

こうした合気武術の技術を支える武術論では、以下のことが明らかになった。技術的な面について、合気武術で力を用いる際には、地球の重力に逆らわない方向に用いること、力を分散させずに一方向に集中させ続けることが重要である。それを技術として端的に示すのが、一点一方向の力によって相手の姿勢を崩し、倒す当身技である。同時に、後の合気道指導者たちに「呼吸力」や「統一力」などの名で継承された呼吸と動きを合わせることによって生じる一種の集中力が重んじられていた。

精神的な面について、合気武術を学ぶには他流派と比較研究せず、師の教えに対して素直に学ぶ姿勢と反復練習が必要である。習得した技術は正当防衛以外に悪用せず、他人に合気武術の技術をみせてはならない。そして、日常生活全般に渡って油断を戒め、精神の力を軽視しなかった。そして、最大の練習成果を発揮するためにも、日々の健康管理にも注意を払っていた。これらはいずれも、真剣勝負の場で確実に勝利するためのものであると理解された。

スポーツ科学研究, 12, 145-169, 2015年, 受付日:2014年8月25日, 受理日:2015年11月5日

連絡先:工藤龍太 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5 早稲田大学東伏見キャンパス内75号館2-202

E-mail: ryutak77@gmail.com